

スポ振ルネサンス(6)

「心でつなぐ活動を！」

京都障害者スポーツ振興会

副会長 水谷 裕

振興会の京都における37年わたる実績は、何処に向いてでも、誰に対しても堂々と胸を張れるものと言えます。

当初に比べ、大きく変容して来た障害のある人々を取り巻くスポーツ環境は、振興会単独の活動だけでなく、他の団体とともに催すスポーツ事業にも広がり、様々な団体との付き合いも格段に増えて来ました。

それだけに、37年わたる実績の上に胡坐を組むことがあつてはならず、いつまでも謙虚さを失わないことが大切だと思います。

初代会長の芝田顧問は、障害のある人のスポーツは、ヒューマニズムが基本」といわれて、在任中からどのような場面においても相手の人を大切にしたい振興会運営を行われておられたし、前会長の内山顧問は、他の団体との関係に気を配っておられました。いうまでもなくこれは、障害のある人々のスポ

ーツの普及と、それらを進める上で不可欠な環境を整えていくための下地づくりの基礎とも言えるべきことであることなのです。

このようなことは、会長とごく一部の幹部だけが気を使って関係維持を図っているだけでは、京都障害者スポーツ振興会の存在は認められても、本当の意味での信頼は、得られないのではないのです。

とりわけ、障害のある人々のスポーツ活動に連する団体や施設との関係は、歴代会長がことある度に言われてきたように、「組織は違つても、協力・共存の関係」にあります。この関係は、上手くいかなければ、迷惑を直接こうむるのは障害のある人々なのです。

単に事業を一緒に行えばできるというものでなく、日常的な人と人としてのお付き合いの中からお互いを理解し、受け入れることによつて、初めて信頼関係が熟成され、本当の意味での「協力・共存の関係」構築されるものなのです。

役員の日頃の態度や対応は、ちよつとしたことで評価され、個人の問題であつても、バツクの団体、つ

まり、京都障害者スポーツ振興会が評価されることになるのです。

日頃、観ていて気になることを挙げると、京都市障害者スポーツセンターの施設利用等で、振興会の施設であるかのような使い方をする者が居たりします。別に、媚を売ることはありませんが、ルールにのつとつた使い方をすべきです。

また、直接、事業と関係することではないので誰も何も言いませんが、振興会の役員が理事会などで京都市障害者スポーツセンターに出入りするときに、ほとんどの者が受付のある玄関を通らずに避難用スロープ横の階段を使つて入り、終われば、また、階段を使つて出る、つまり、顔を見せずにセンターを利用しているのです。普通の利用団体ならそれで良いのですが、振興会は、他の利用団体とは少し違う立場なのです。障害のある人々のスポーツ活動を支援する団体としてセンターと協力・共存を図る関係、しかも、事務局を置かしてもらつて立

場なのです。「こんにちは」「さようなら」も言わないなんて、

役員として、大人として、礼を欠いていると思いませんか？

全国で4番目に誕生した団体の役員として恥ずかしいとは思いませんか？
こんなことでは、真の信頼関係は築けるものではありません。
まず、役員として礼節のある行動をとつて欲しいものです。

最後に断つておきますが、今回の内容は、いうまでもなく、センターの職員としてではなく、振興会の副会長として書いたものですので、誤解の無いようにしてください。

「こんにちは」「さようなら」も言わないなんて、

第12回全日本障害者フライングディスク競技大会 IN TOKYO

日時 8月3日(日)

会場

駒沢オリンピック公園 陸上競技場

土橋 洋之

(福知山SCGMW)

デイスタンス

41.83m 2位

アキユラシー

5投 6位

吉田 清

(京都障害者FD協会)

デイスタンス

33.62m 1位

アキユラシー

5投 5位

平井 喜代子

(京都障害者FD協会)

デイスタンス

30.87m 1位

アキユラシー

6投 5位